

## 8 The Coast Of High Barbary

### I この歌の時代背景

アルジェリアのアルモハド帝国の滅亡は、権力の空白を作った。そしてそれは、バーバリー・コーストとして知られるようになった、海賊の出現に繋がった。この海岸に面した諸都市は、私掠船を雇って、公海上に於いて貿易の激しい競争の中で商船を捕らえ、利益を得た。1801年まで、アメリカとイギリスはこれらの海賊船から、商船の自由な航行を保証してもらうために、北アフリカの4つのバーバリー諸国（アルジェリア、モロッコ、トリポリ、チュニジア）に所謂、年貢を支払ってきた。この歌はバーバリー海賊と勇敢に戦うプリンス・オブ・ウェールズ号を祝福して、CHARLES, DIBDIN という英国海軍の軍歌の作曲者が作曲したものである。また、もう一方の船の名前にプリンス・オブ・ルッター一号が度々、出てくるが、これは遙かにもっともらしい、プリンス・ルパートの名前が訛ったものようである。

### II 歌詞の日本語訳

#### ハイ・バーバリーの海岸

古いイギリスからやって来た、2隻の堂々たる船があった。  
どんなことがあっても、俺達は航行した。  
一隻はプリンス・オブ・ルッター号、もう一隻はプリンス・オブ・ウェールズ号、  
ハイ・バーバリーの海岸に沿って、南下していった。

“マストの上に昇ってくれ、マストの上に、”陽気な甲板長が叫んだ。  
“船首を見てくれ、船尾の方はどうだ。風上を見てくれ、風下はどうだ。”

“船尾には何もありません(甲板長!)、風下にも、です。  
けれど、風上の方向に、堂々たる船が一隻航行しているのが見えます。  
奴は早くて、追い風に乗ってます。”

“奴に合図をするんだ、合図を送れ!”、勇敢な船長が叫んだ。  
“貴様の船は軍艦か、私掠船か、それとも商船か?”、彼は云った。

“こっちは、戦艦でもなければ、私掠船でもない、”相手は答えた。  
“古参の海賊で、報酬を求めているんだ。”

俺達は相手の舷側に向けて長いこと停泊した。  
プリンス・オブ・ルッター号が海賊船のマストを打ち倒すまで、

その時、あの海賊共が命乞いをしやがった、命乞いをさ。  
けれども、俺達が奴らに出した答えは、全員奴らを海に  
沈めてしまったことだ。

解説・日本語訳：宮崎多加雄